

## 第4章 マリの歴史と社会におけるトゥアレグ人の位置 —生態学的適応・生業分化・人種的表象—

坂井 信三

### はじめに

西アフリカ内陸地方は、サハラからサヘル、サバンナへという生態学的な移行地帯にまたがっており、そのために生業形態や文化においても多様な集団が分化している。それら分化した諸集団間の相互関係は、サハラ越え交易とサヘル国家形成をとおして、西アフリカの歴史の重要な要因となってきた。

一方この地域の歴史記述をふり返ってみると、中世期のアラビア語文献以来、地理的・宗教的な認識枠組みがあったことが見受けられる。それは（東西に流れていると想定されていた）ニジェール川を境にして、北側をビーダーン (*bīdān* : 白人) の領域、南側をスーダーン (*sūdān* : 黒人) の領域として区分し、両者の関係をとおして地域の政治状況を語るという枠組みである<sup>1</sup>。この区分は、しばしばムスリム＝ビーダーンによるカーフィル＝スーダーンの奴隷化を正当化する根拠ともなった。さらに植民地化とともに、この認識枠組みと部分的に重なり合う人種主義的区分 (Blanc＝白人・文明、Noir＝黒人・未開野蛮) がフランスによって持ちこまれた。

現在マリでおこっている政治的混乱とそれに関連する言説には、諸集団の生活形態の分化と相互関係という事実にくわえて、二元的に区分された人種的表象が錯綜した形で関わっているように思われる。アザワドの独立を主張する MNLA の言動や、それに反発する南部マリの人々の言動にも、二元的な人種的表象が見え隠れする。人種的表象は、錯綜した政治的事態を単純化して見せるだけに、かえって解決困難な事態を生みかねない。外部の研究者や外交関係者は、こうした表象に対しては冷静かつ批判的に対応しなければならないだろう。

この論文では、事実としての生態、社会、文化にわたる生活形態の分化と、それにまつわる人種的表象の中で、トゥアレグとよばれる人々が、かつてどのような位置にあったのか／いまあるのか、整理してみたい。

### 1. ニジェール川流域の生態条件と生業形態

ここではマリ北部という地域の構造を、ニジェール川の水系と降雨量による気候帯という二つの条件から記述してみよう (地図 1, 地図 2)。

### (1) サハラとサヘル

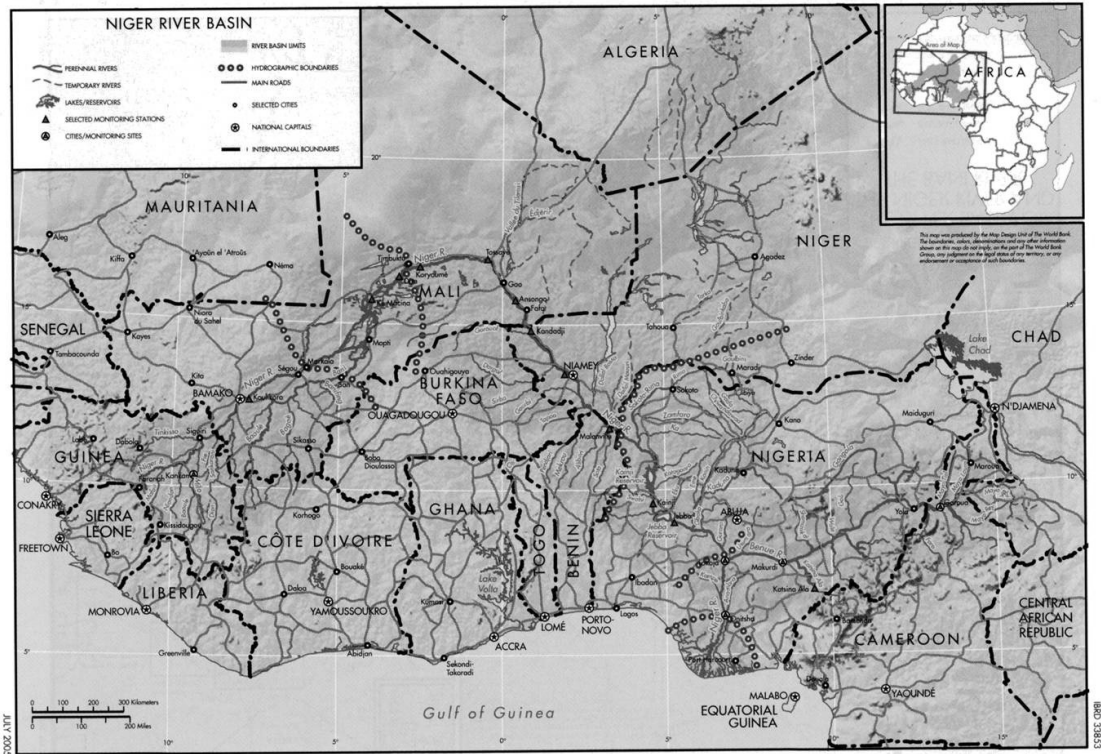
ギニア産地に発するニジェール川は、内陸サバンナを南西から北東方向へサハラ砂漠に向かって流れ下るが、北緯 16°あたりで砂丘群にぶつかり南東方向へと大きく流れを変える。この部分はニジェール川「大湾曲部」(Boucle du Niger, Niger Bend) とよばれる。大湾曲部の入り口部分には湖沼地帯が形成され、それより下流側で、サハラから Wādī el-Ahmar (トンプクトゥ近郊) と Tilemsi (ガオ近郊) とよばれる干上がった古い河谷が合流してくる。前者の古い氾濫域がアザワド (Azawad) とよばれる地帯で、後者をさかのぼっていくと Kidal を経由して Ifoghas の山岳地帯 (Adrar des Ifoghas, Adrar-n-Iforas) にいたる。一方ニジェール川南岸、つまり大湾曲部の内側には古河谷はなく、グルマ (Gurma) とよばれる乾燥したステップ地帯が広がっている。

気候帯として見ると、アザワドの年間降雨量は 200 mm 以下で植生は乾燥したステップから砂漠へと移行していく。南岸のグルマの降雨量は 300~500 ミリ前後で乾燥したステップと疎林になっており、いわゆるサヘルの景観をなしている<sup>2</sup> (地図 3、地図 4)。

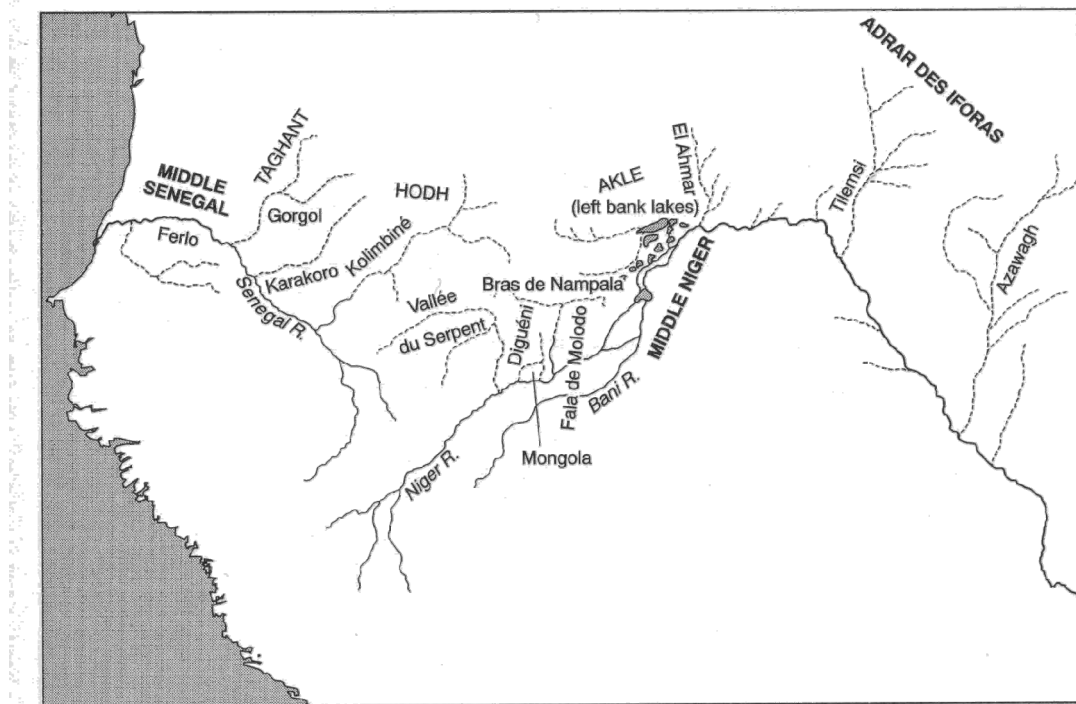
年間降雨量 200 mm 以下で可能な生業は牧畜だけである。トゥアレグ (Tuareg) やモール (Maure アラビア語を話すベルベル人) の牧畜民は、牛、羊、山羊、ラクダの移牧生活を基本にしてきた。乾燥地に草原が広がる雨期には、トゥアレグ人は主としてアザワドの東部とグルマの広大なステップを遊動し、一方モール人はアザワドの西部を遊動域とする。草原がひからびてしまう乾期には、両者は水のあるニジェール川岸に回帰する。家畜はラクダ<羊・山羊<牛の順で水の必要量が増えるので、家畜の種類によって移牧域も距離も変わる。乾期のもっとも乾燥した時期には、トゥアレグの一部は牛のための水と牧草を求めて内陸デルタ (次項) にまで入り込み、その地方の牧畜民フルベとしばしばトラブルをおこす<sup>3</sup>。

一方サヘルの気候帯でも、ニジェール川水系によってある程度の水が供給される場所では農耕も可能である。ただし、降雨量の変動幅は年ごとに 25% 程度と大きく、安定していない。こうした条件の下、ソンガイ (Songhai) 人の農民が氾濫原を利用して水稻耕作をし、乾燥地では天水を利用して雑穀栽培をする。同じソンガイ語を話すニジェール川の漁民は Sorko とよばれる。

グルマはニジェール川に沿う地帯だが水に恵まれず、人口も少ない。ソンガイ帝国 (16 世紀) 以前には Hombori の山岳地帯に雑穀栽培の農耕民 (今日 Dogon とよばれる) が居住する他は、牧畜民の移牧域になっていたと思われる。ソンガイ帝国の退潮とともにこの地域ではトゥアレグ人の勢力が強まり、トゥアレグ社会の下層民として農耕に従事する Iklan (ソンガイ語で Bellah) とよばれる人々の人口が多くなっていった<sup>4</sup>。

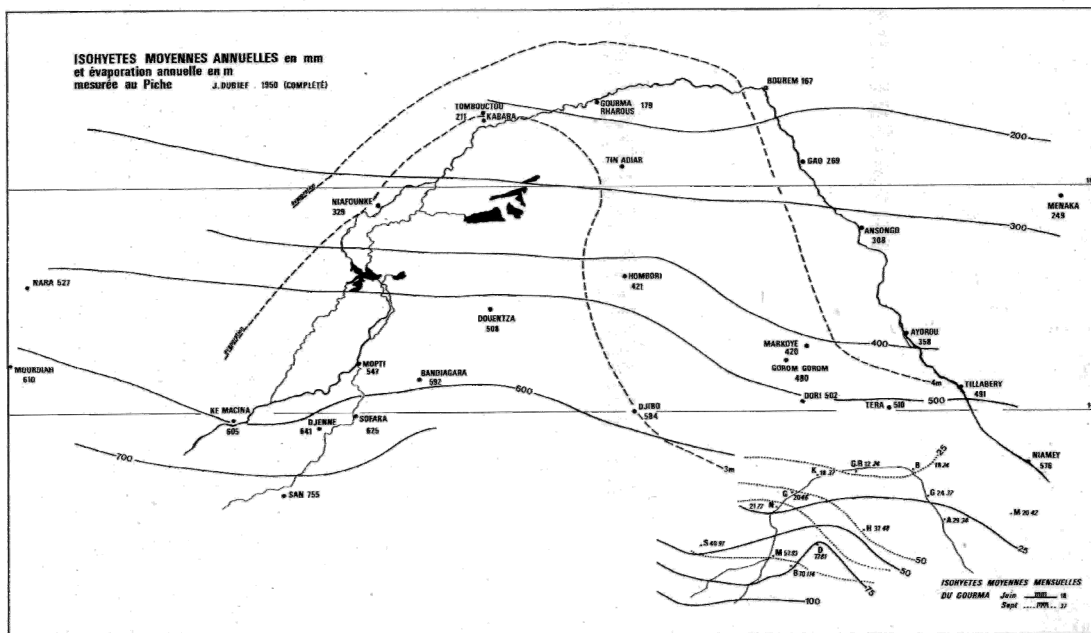


地図1 ニジェール川水系 Golitzen, Katherin G. (ed.) *The Niger River Basin: a Vision for Sustainable Management* (The World Bank, 2005).



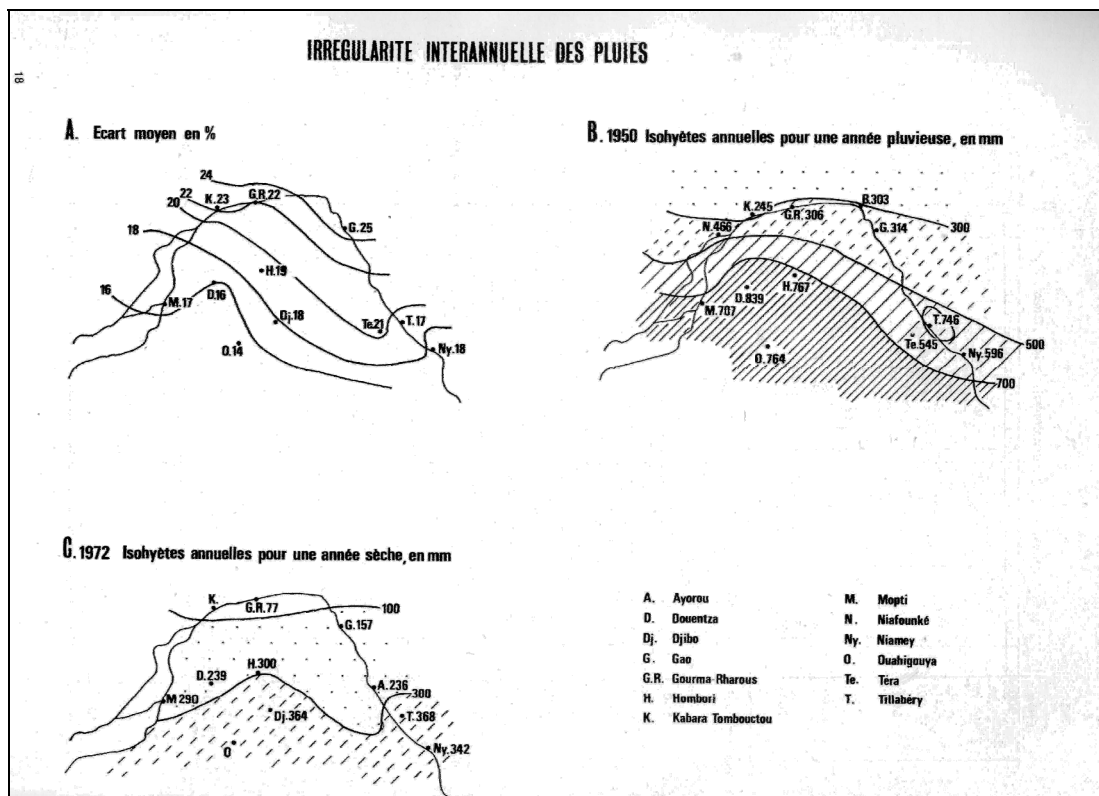
地図2 先史時代の水流

McIntosh, R. James *The Peoples of the Middle Niger* (Oxford, Blackwell Publishers, 1988)



地図3 大湾曲部とグルマの年間降雨量

Gallais *Pasteurs et Paysans du Gourma; la condition sahélienne* (CNRS 1975).



地図4 年による降雨量の変動 Gallais Ibid.

## (2) 内陸デルタ

一方、大湾曲部の上流側、北緯 14°から 16°のあたりはきわめて平坦な地形を成しており、そこでニジェール川の水流がとどこおるために、増水期には東西 100 km、南北 300 kmにおよぶ大氾濫原が形成される。これが「内陸デルタ」(Delta intérieur、Inland Delta)である。

この地方の年間降雨量は 300～600 ミリ前後なので本来ならグルマと同様のステップから乾燥サバンナを形成するはずだが、ニジェール川の氾濫のために年間をとおして完全に乾燥してしまうことがなく、豊かな水と草に恵まれている。

水に恵まれた内陸デルタには、多様な形態の水圏学的条件と土壌の分化があり、川、沼、湖の水産資源を利用する漁民 (Bozo, Sorko)、水運に従事する職能民 (Somono)、湿原と乾燥陸地の農業資源を利用する農民 (Marka, Bambara)、渇水期に水の引いた草原を牧草地として利用する牛牧畜民フルベ (Fulbe) が生態学的ニッチを分け合っている<sup>5</sup>。

生態学的ニッチの分化が貧弱なサハラとサヘルの住民にとって、生産力の高い内陸デルタは欠くことのできない生活物資の供給源となってきた。

## (3) 交通手段としてのニジェール川とサハラ

サバンナを縦貫するニジェール川は水運の手段を提供したので、古くから北の砂漠と南のサバンナをつなぐ交易がおこなわれてきた。この交易のサバンナ側の集積地が Jenne で、砂漠側の集積地がトンプクトゥ (Tombuktu) である。トンプクトゥからは、北に El-Ahmar の河谷をたどり、Arawan から岩塩鉱 Taudeni と Taghaza をとおり、Marrakesh、Fez へいたる塩金交易の主要交易路があった。ガオからは Tilemsi 河谷をとおって Es-Suq (Tadmakkat)、Ghadames を経由し、Qayrawan や Tripoli にいたる交易路があった。これらの経路はトゥアレグやモールの牧畜民の移牧域と重なっており、そのため交易の輸送をつかさどったのは彼ら牧畜民だった<sup>6</sup>。

一方内陸デルタでは、漁民・農民・牧畜民はさまざまなレベルで生産物を交換するシステムを作っており、そのネットワークの最上位にサハラ越え交易を中継する交易都市ジェンネとトンプクトゥが位置づけられていた。このネットワークをとおして、内陸デルタは基本的な生活物資を自給できないトンプクトゥとその後背地に向けて、穀物や布などほとんどすべての生活物資を送り出していた<sup>7</sup>。

ジェンネとトンプクトゥはともに 13～15 世紀のマリ帝国の時代に成立したが、16 世紀にソンガイ帝国の支配が広がって以来、両都市の言語はソンガイ語になっている。主な住民は、ソンガイ人、フルベ人の他、マンデ系の商業民 (Wakore、Wangara)、ベルベル・アラブ系の商業民、そして多様な民族的出自をもつイスラーム宗教職能者である。両都市は

マリのみならず西アフリカの文明の中心都市だったが、植民地化以降交通手段が陸上のトラック輸送に移り、かつサハラ交易が意義を失ったために衰退を余儀なくされ、現在では観光以外に産業がなくなっている。

水上輸送に代わって、今日ではマリ南部（バマコ）から中部（セグー、モプティ）を経て東部（ガオ、アンソンゴ）にいたる幹線道路がトラック輸送の中軸となった。そのため、かつては僻地にすぎなかったグルマの戦略的意義ははるかに大きくなっている。今回の混乱の中で、グルマの守備の要である Douentza が陥落し反乱勢力がモプティに迫ったことが、マリ政府がフランスの介入を要請した直接のきっかけになったことは記憶に新しい。

## 2. 地域社会の構造

以上のとおり、マリ北部は自然地理学的にみればサバンナから砂漠への移行地帯であると同時に、人文地理学的に見れば、そこを縦貫して流れるニジェール川を基軸に、異なる生態学的適応＝生業形態をもつさまざまな民族が交渉してきた場所である。トゥアレグをめぐる今日のマリの状況を考える際にも、トゥアレグだけでなく、その他の諸集団との関係の中にあるトゥアレグを考えなければならない所以である。

私はこれまで内陸デルタを中心にマリの歴史人類学を研究してきた。その中でくり返し確認したことは、内陸デルタでは諸集団の水平的な交換・交渉関係が、生態学的にも社会的にもきわめて重要な役割を果たしてきたということだった。ここではそれと比較しながら、サヘル・サハラのトゥアレグ人社会を理解するよう努めたい。

生態学的ニッチが豊かに分化した内陸デルタでは、同じ地理的空間に異なる生態学的適応形態をもつ人々が隣接して生活している。漁民、農民、牧畜民は、それぞれ非常に異なった生態学的ニッチ、生業形態、社会構造、文化的価値観をもっているが、相互の間の日常的な交換関係が地域社会を成立させている。その交換関係は、日々の物々交換から定期市、交易都市までを含む経済的な交換システム、定住農耕民の土地利用権と漁民・牧畜民の季節的移動を調整する社会慣行、そして異なる集団間の慣習的な儀礼的同盟に代表される共存・共生の文化的価値観として表われている。もちろん政治的には、いずれかの集団が他を凌駕して勢力を拡大することが歴史的に何度かあったが、それでも政治的な支配－被支配関係は共存・共生の文化的イデオロギーによって粉飾され、否認される傾向がある<sup>8</sup>。

それと比較すると、大湾曲部とグルマに見られる集団間関係は、より単純で、垂直的な性格を示しているように感じられる。

サヘルの住民の中でも、トゥアレグ人社会がとくに強い階層制をもっていることは民族誌文献ではよく知られている。それぞれの階層にはタマシク語で固有のカテゴリー名称

があるが、単純化していえば、最上位には戦士貴族、次に自由身分の家畜飼育者とイスラーム宗教職能者、その下に手工芸職人、そして最下層に奴隷が位置づけられていた。

この階層制は、遊動性の程度とも対応している。上位層の自由身分の人々ほど広大な遊動域を生活域とし、中位のイスラーム宗教職能者や下位の手工芸職人は都市的集落に居住している。奴隷はどの層の人によっても所有されるので、生活形態は主人のそれにしたがうが、農耕に従事する場合は農耕集落に縛りつけられてもっとも定住性が高い。

遊動性の程度は政治的・経済的な力と対応している。つまり、広大な遊動域をコントロールする手段（部族組織、移動手段、武装）をもつ戦士貴族が、それを軍事的政治的に活用して、サヘル・サハラでの牧畜生活に不可欠の物資を生産する都市的集落や農耕集落の定住民を支配下に取りこんでいるという構図である。1956年の統計資料によると、大湾曲部とグルマのトゥアレグ人社会では、地域によって人口の25%から70%、平均して55%が最下層の奴隷身分（Ikkan）にあった<sup>9</sup>。アラビア語を話すベルベル系の牧畜民（Maure、Berabishなど）の社会でも、トゥアレグと同様自由身分に対する奴隷身分（Harratin）の割合は23%～64%だった<sup>10</sup>。

また移動と武装の能力は、そのままサハラ越え交易を支配する手段でもあったので、戦士貴族層は交易都市に居住しないまま、遊動生活をしながら都市に対して強い政治的影響力を行使していた。

図式的にいえば、生態学的なニッチに富む内陸デルタでは、豊かな資源を多様な方法で利用する諸集団が相互の間に水平的な交換関係を結ぶことによって、諸集団の自律性と相互依存性を両立させた地域社会が編成されている。それに対してニッチ分化に貧しい砂漠辺縁では、乏しい資源をめぐって地域社会の編成に政治経済的支配構造が目立っているといえるだろう。

### 3. 二元化された表象

以上のような生態学的・政治経済的な構造のために、砂漠辺縁の集団間の関係は垂直的な主—従関係として表象される傾向がある。支配—被支配関係は自由身分—奴隷身分の二極化として表現され、そこに道徳的な優劣の表象が付随している。つまり最上位層は優雅・高貴な貴族であると同時に勇猛果敢な戦士として表象され、その対極に位置づけられる最下層の農耕従事者は下品で愚鈍で臆病な奴隷として表象される。

だがそれにくわえて、サヘル・サハラの前社会における支配—従属の二極関係は、人種的表象によって二元化される傾向があったことにも注目しなければならない。とくにマリ独立後、トゥアレグ人反乱分子が南部マリの住民によって「黒人」を奴隷化してきた

「白人」として表象され、激しい敵意の対象となったことに注意しなければならない。そうした問題関心については、とくに 2000 年代以降、新しい研究が蓄積されつつあり<sup>11</sup>、現段階でまとめるのは難しいが、ここではその歴史的概略を述べておこう。

### (1) 人種的区分と地理的区分

この地域における人種的表象には、第一にイスラーム文明にまつわる地理的表象がある。サハラ・サヘル地帯は、イスラーム世界の人々にとって黒人アフリカ世界 (*Bilād as-Sūdān*) との接点だった。最初に述べたとおり、歴史的な地理文献では、東西に流れていると想定されたニジェール川 (Nil) を境にして、北側をビーダーン=「白人」の住むイスラームの領域、南側をスーダーン=「黒人」の住む異教 (クフル) の領域として区分し、両者の関係をとおしてこの地域の政治状況を語るという枠組みがあった<sup>12</sup>。

もっとも両者の区分は歴史的に変動してきた。たとえば中世期のマリやソンガイのようにイスラームを受け入れたスーダーンの有力国家はイスラーム圏 (*Dar al-Islām*) の一部と認識されたので、サハラのベルベル人がスーダーンに含まれる場合もあったのである。

マリ時代のサハラ交易の重要な中継地だった Tuwat の町は 14 世紀のマリの王マンサ・ムサのメッカ巡礼に同行したマリンケ人によって創建されたと伝えられるとおり、このころマリの勢力範囲は中央サハラにまで広がっていた。同時期にマリを訪れたアラブのイブン・バットゥータの記録からは、彼がサンハージャのベルベル人を自らと同じビーダーンつまりアラブ・イスラーム文明圏に属する「白人」とは見なさず、スーダーンの王の権威下にある現地住民と見なしていたことがわかる<sup>13</sup>。同様に、ソンガイ帝国最後の世代に属するトンブクトウの大学者 Ahmad Bābā (1556-1627) はサンハージャのベルベル人だったが、そのニスバが *at-Takrūrī* (Takrūr は黒人のイスラーム国家を指す語) や *as-Sudānī* となっていることから、彼がスーダーンの側に位置づけられていたことがうかがえる<sup>14</sup>。

ところが 17 世紀以降サヘルの大帝国が衰退し、サバンナの新興勢力がイスラームから離れていく時代になると、その状況は変わってくる。

たとえば Hall によると、トゥアレグの一派でシャリーフを主張する宗教職能者集団 Kel es-Sūq の聖者で、アザワドの中心地 Arawan の始祖として崇敬される Ahmad ag Adda (d.1635) に関して、次のような伝承がある。1591 年にソンガイを侵略したモロッコ軍の将 Jawadir は、ソンガイ軍との会戦に際してまちがいなく (ソンガイの)「黒人だけ」を攻撃できるよう Ahmad ag Adda に祝福を願い、受諾された<sup>15</sup>。この伝承は明らかにソンガイ帝国の衰退後に成立したものだが、そこではトゥアレグの Ahmad ag Adda はモロッコの Jawadir とともにビーダーンの側に立ち、スーダーンであるソンガイ人と対峙しているわけ



である。

同様の見方は、アラブ出自とされる宗教職能者集団 *Kunta* の聖者であった *Sīdī al-Mukhtār* (1729-1811) の文書にもはっきり表われている。「スーダーンはカーフィルが住民の大半を占める国であって、…人々は一般に無知と闇と恣意と無信仰にとどまる支配者のふるまいをまねている」<sup>16</sup>。この場合 *Sīdī al-Mukhtār* は暗黙のうちに自らをビーダーン＝ムスリムの側に位置づけ、スーダーンを異教徒の領域、すなわちジハードの対象となる戦争圏 (*Dār al-harb*) と見なしている。

19世紀初めにはナイジェリアのソコト (*Uthman dan Fodio*:1804) とマリの内陸デルタ (*Sheikh Amadou Lobbo*:1815) のフルベ人が相次いでジハードを起こしたが、その際この *Sīdī al-Mukhtār* による戦争圏の認定がジハード遂行の根拠のひとつとなった。またジハードの過程でフルベ人自身も北アフリカを征服したアラブの‘*Uqba b. Nāfi*’に始祖を求めて、ビーダーンであるフルベ人がスーダーンの異教徒を支配する正統性を主張するようになる<sup>17</sup>。

このように、17世紀以降、モール、トゥアレグ、フルベら、サハラ・サヘルの牧畜民諸集団が系譜操作によって自らにイスラームの宗教的権威を付与し、スーダーン＝異教徒に対する優位を主張するようになる。ビーダーン／スーダーンの区分は、セネガルからナイジェリアにわたるサヘル全域でジハードが続発した17世紀以降19世紀末に至る時代に、イスラーム／異教の対立の中で先鋭化していったといえるだろう。

## (2) 地域社会内の系譜認識

しかし人種の表象は、地理的区分とは別のかたちでも存在していた。それは、地域社会内部の系譜認識である。

たとえば17世紀以降聖者のリネジとして南サハラに絶大な宗教的権威を確立したクンタの場合を見てみよう。クンタの成員の中にはサバンナの黒人系の人々との通婚によって混血した人々が数多くいたが、Hallによれば、上述の *Sīdī al-Mukhtār* の息子である *Sīdī Muhammad* はある文書の中で彼らに「スーダーン」の用語をあてず、かわりに「黒い」を意味する *al-kuhl* という別語を用いている。つまりその人々は外見上は黒くても系譜上は自由身分のクンタであって、「スーダーン」(この文脈では、アラブ・ベルベルの出自をもたずビーダーンに従属する人々 (*mawālī*) を含意する人を指すカテゴリー) は適用されなかったのである<sup>18</sup>。

同様に外見でなく系譜を重視する認識は、クンタだけでなくサヘル・サバンナの諸集団に広く見られる。たとえばサヘルの諸民族には、さまざまな程度で混血していてもアラブ

の *sharif* の出自を主張する人々はたくさんいるのである。

植民地化以前のトゥアレグ社会の内部にもまた、スーダーンとはちがう「黒い人」の категорияがあった。Lecocq によると、トゥアレグの社会は *koual* 「黒い」、*shaggaran* 「赤い」、*sattafan* 「輝かしい、緑がかった黒」（貴族の印であるインディゴで染めた頭布の色）の三つの categoria があった。*koual* は職人（鍛冶屋）・奴隷と結びつき、*shaggaran* は貴族でない自由身分と、*sattafan* は戦士貴族と結びつく色だった<sup>19</sup>。

トゥアレグは伝統的に母系出自をもっていたので、下層出身の *koual* 「黒い」妻から生まれた子供は下層に位置づけられ、かつ下層の男性が上層の女性を娶ることはまずあり得ないので、系譜上「黒い」人が上位層に溶けこんでいくことはないことになる。だが上述のように、外見上は黒くても由緒あるビーダーンの系譜をもつアラブ・ベルベル人、ソングアイ人は数多くいるので、そうした人々との通婚をとおして上位層にもかなり幅のある遺伝特性をもった人々が帰属することになる。さらに Norris によるとトゥアレグ社会ではイスラーム化に応じて父系出自が強くなっていくので<sup>20</sup>、結果的に上述のクンタの状況に近くなっていく。つまり、一見人種的なラベルに見える categoria の区分があっても、社会的地位の基準は系譜関係の認識にあったのである。

### (3) 「生物学的」人種観

このようにサハラ・サヘルの社会でおこなわれていた人種的な categoria 区分は、政治的・宗教的、あるいは社会的な性質のものだった。ところが植民地化とともに、ここに近代ヨーロッパで成立した「生物学的な」人種観が持ちこまれる。

近代ヨーロッパの社会が生物学的な特性と道徳的な特性をつき混ぜた近代的人種観を生み出したことはよく知られている<sup>21</sup>。その基本的な構成要素はダーウィン主義的な社会進化論と、聖書に由来するセム・ハム人種論にあるといえるだろう。フランスの植民地支配は、そうした人種観をもとに住民を進化＝文明との距離によって分類し、配列していった。

たとえば Harrison が示しているフランス植民地における原住民保護政策のための院外行政委員会に提出された報告書によると、仏領西スーダンの住民は次のようにランクづけされていた<sup>22</sup>。

- (1) 白人起源のベルベル、アラブ、
- (2) セム的特徴をもつフルベ、
- (3) 比較的よい素質を持つハウサ、ソングアイ、ウォロフ、ソニンケ、
- (4) 粗野な未開の習慣を残しているが、比較的知性が高く、エネルギーをもっているマンディンゴ、バンバラ、マリンケ、ソソ、アグニ、ナゴス、
- (5) 未開野蛮状態にとどまるセレール、ジョラ、

ハベ（ドゴン）。

この分類序列が「セム／ハム」という人種概念と 19 世紀的な社会進化の概念の二つの基準で作られているのは指摘するまでもない。だがもうひとつ指摘すべきことは、こうした住民分類システムにおいては、民族（ethnie）と人種（race）が同一視される結果、たとえば上述のように多元的な構成をもつサヘルの地域社会におけるカテゴリー区分との間に、大きな不一致が生じることである。

植民地政策が持ちこんだもうひとつの問題は、奴隷制の廃止である。フランスは 1905 年に仏領西スーダンの奴隷制を廃止し、奴隷解放を宣言した。だが Pelckmans がいうとおり、奴隷身分からの解放によって利益を得た者はわずかだった。解放令によって「出ていった者は、しばしば別の場所ではそ者として新しい従属関係に入るか、あるいは現実の力関係を組み替える手段もなしに元いた所に帰ってくるようになった。一方昔ながらの主人と奴隷の互惠関係を求めて、実質的に奴隷身分にとどまる者もいた。かつてある程度の社会的安全と、うまくすれば多少の物質的利益をもたらしてくれた（奴隷制という）イデオロギーを作り直すことができた者は、ほとんどいなかったのである」<sup>23</sup>。

結局こうした政策は、サヘルの住民にとって、一方では ethnicization（民族の人種化）によって地域社会の複合的な住民構成を「白人」（Blanc）と「黒人」（Noir）に分断し、他方では奴隷解放令によって地域社会の階層間にあった相互依存関係を否認するという事態をうんだ。とくにトゥアレグ社会の下層民であった Iklan は、分類上「黒人」＝Bellah として「白人」＝トゥアレグから分離されながら、しかも社会的地位においては旧来の従属的立場を精算することができないという状況になったわけである。

他方植民地の生産構造は根本的に組み替えられる。マリの産業はニジェール川流域の主要な生産物となった綿花、落花生を鉄道でダカールやアビジャンの港に運び出す海岸向きの物流が主流になり、その結果内陸のサハラ越え交易は産業としての意義を失う。地域間の生態学的差異に立脚して、定住農耕と移牧、都市生活と移動生活の組み合わせによって編成されていたサヘルの地域社会はこうして内在的な構造的契機を失い、エスニック化された諸集団のモザイクに転化してしまう。

このような文脈の中で、サヘルの地域社会の上述のような住民区分は、「白人」（Blanc）／「黒人」（Noir）という人種主義的な表象によって再解釈されることになる。

フランスの植民地体制のもと、とくにその初期においては、トゥアレグ人は北アフリカの先住民とされたベルベル人＝地中海人種一派であり、それゆえに南仏ラングドックの住民と同質であって、「白人」の中でもアラブよりはるかにフランス文化になじみやすいという人種観があった<sup>24</sup>。こうした見方を引き継ぎながら、フランス人行政官はトゥアレグ

人地域社会における上述の区分の *shaggaran* (貴族でない自由身分) と *sattafan* (戦士貴族) を「白人」(Blanc) に、*koual* (職人と奴隷) を「黒人」(Noir) に読み替え、かつ「白人」を *noble* と見なすようになる<sup>25</sup>。ところが 1940 年代から 50 年代にかけて独立を求めて活動したアフリカ人政治結社 US-RDA (Union Soudanaise – Rassemblement Démocratique Africain) は、同じ表象を逆向きに利用して、「白人」であるトゥアレグは「黒人」である南部の住民に略奪をくり返し奴隷化してきた圧制者だという言説を用いて、トゥアレグの奴隷=ベラの解放を重要なキャンペーン・テーマとして位置づけた<sup>26</sup>。

独立後のトゥアレグ人の反乱に際してもこうした表象はくり返し持ち出された。とくに 1990 年代の反乱において、マリ国軍と連携してソンガイ人を主体に組織された自警団 Ganda Koy は、その目的として、トゥアレグの奴隷であった定住農耕民をかつての主人の反乱・略奪から守ると同時に、「白人のノマド」をソンガイ人の土地から追い出すことを標榜してはばからなかった。こうした煽動に賛同して、「白人」であるトゥアレグやモールに対する迫害・殺害に手を貸す者がベラの中からも出たのである<sup>27</sup>。

同様の人種主義的な構図は、今回の紛争でもやはり再燃している。たとえば MNLA による北部マリの占領後難民化した人々の中には、トゥアレグの報復を恐れて逃亡した「黒いトゥアレグ」すなわちタマシク語を話すベラの人々が多かったし、マリ国軍が「白人」と見なされたトゥアレグやアラブ、モールの民間人を殺害する事件も起こっている。

#### (4) ビーダーンのイメージの変化

一方、イスラームの宗教的区分と重なったビーダーン/スーダーンの区分が、イスラーム主義者の流入という今回の事態の中でどう変化しているか、気にかかるところである。現状の把握は困難だが、Scheele はトゥアレグのイスラーム職能者集団 Kel es-Sūq で起こった最近の動きについて、興味深い報告をしている<sup>28</sup>。

それによると、アラワーンの聖者 Ahmad ag Adda を始祖とする Kel es-Sūq の中でもシャリーフの系譜を誇る最上位にあった人々は、早くからアラワーンを離れてトンプクトゥやバマコで起業家として成功した者が多い。今日、彼らの子孫たちは牧畜の生活様式を失い、アラビア語を話さなくなり、裕福な都市生活者になっている。また彼らは裕福なソンガイ人らと通婚してきた結果、はっきりした「白人」的外観をもたないことも多い。

一方衛星放送が普及する中で、マリの一般の人々は中東アラブのムスリムを頻繁に見るようになり、彼らをビーダーンのモデルとしてイメージするようになってきたという。そういう観点からすると、アラビア語を話さず、「白人」的外観をもたない Kel es-Sūq の上層の者たちは、新しいビーダーンのモデルに当てはまらない。他方、サヘルに残った中層

以下の人々は、内婚のために上層の者たちより「人種的に純血」で、しかもアラビア語しか話さないことが多い。1990年代には、アルジェリアから流入したイスラーム主義者たちがそうした中・下層のアラブやベルベルの子女と通婚し、長く政治経済的利益を独占してきた上層のシャリーフに対する彼らの不満を改革主義的イデオロギーに媒介することもあったという<sup>29</sup>。

西アフリカ内陸では古くからビーダーン／スーダーンの区分がムスリム／カーフィルの区分と連動しており、スーダーンのイスラーム受容は表面的なものに過ぎず、真のイスラームはビーダーンによってもたらされなければならないという宗教的イデオロギーが、潜在的にはなお残っている。上述のとおり18・19世紀のジハード運動の背景にはそうしたイデオロギーがあったし、私自身、ある（見かけ上は黒い）シャリーフからそういう言説を聞いたことがある。

## おわりに

生態学な移行地帯をなすサハラ・サヘル・サバンナでは、もともと生業分化した諸集団が相互依存的な社会関係を結んで地域社会を編成してきた。しかしトゥアレグの社会は、植民地化から独立をへて現在までの時代の流れの中で、奴隷解放とマリ社会のエスニック化によって定着農民に依存した食料の生産基盤を失い、西アフリカの世界経済への組み込みによってサハラ越え交易による収入も失うことになった。その結果、独立後彼らの中からはさまざまな形でアルジェリアやリビアに流出したり、最近ではサハラを舞台に薬物の密輸や人身売買、身代金目的の人質誘拐などの非合法活動に手を染める者も出てくるようになった。マリ市民として生活基盤をもつトゥアレグ人が大半である中で、マリ北部の地域社会から遊離してしまった人々も多いのである。そうした人々によるトゥアレグの分離独立運動は、マリの一般の人々の理解をとうてい得られるものではない。

一方人種的な表象に関していうなら、今日の状況で、人種主義的な「白人」の表象をトゥアレグ人自身が表立って利用することは考えにくいだろう。それはマリ国民の大半を占める「黒人」の反発を招くだけだからである。だが「ビーダーン」の表象がイスラーム改革の文脈で持ち出されることがないとはいえないかもしれない。実際にはマリ国民の大部分がムスリムとなっている現在において、「ビーダーン」にまつわる宗教的イデオロギーがそのまま再燃することはないだろう。だが、中東から流入してくるグローバル化したイスラーム過激主義がマリの社会に入り込んでくる経路の一つとして、「ビーダーン」の表象には今後も注意しておかなければならないだろう。

—注—

- <sup>1</sup> Hunwick, J. O. “A Region of the Mind : Medieval Arabic Views of African Geography and Ethnography and their Legacy”, *Sudanic Africa* 16, (2005), pp.103-136.
- <sup>2</sup> Gallais, Jean *Pasteurs et Paysans du Gourma; la condition sahélienne* (CNRS,1975).
- <sup>3</sup> Galloy, Pierre “Nomadisme et fixation dans la région des Lacs du Moyen Niger”, in P. Galloy, Y. Vincent and M. Forget, *Nomades et Paysans d’Afrique noire occidentale* (Université de Nancy,Annals de L’Est, 1963).
- <sup>4</sup> Gallais 1975.
- <sup>5</sup> Gallais, Jean *Delta intérieur du Niger ; Etude géographique régionale* , tome 1 and 2 (Dakar, IFAN, 1967).
- <sup>6</sup> Lydon, Ghislaine “On Trans-Saharan Trails: Islamic Law, Trade Networks, and Cross-Cultural Exchange in Nineteenth-Century West Africa” (Cambridge University Press, 2009).
- <sup>7</sup> 坂井信三 「西アフリカの王権と市場」、佐藤次高・岸本美緒編『市場の地域史』(山川出版社,1999) .
- <sup>8</sup> 坂井信三 『イスラームと商業の歴史人類学—西アフリカの交易と知識のネットワーク』(世界思想社, 2003).
- <sup>9</sup> Galloy, “Nomadisme et fixation”, p.12.
- <sup>10</sup> Gallais, *Delta intérieur du Niger*, p.74.
- <sup>11</sup> Hall, Bruce F. “The Question of “Race” in Pre-colonial Southern Sahara”, *Journal of North African Studies*, 10,- 3/4 (2005), pp.339-367. Hall, Bruce F. “A History of Race in Muslim West Africa, 1600-1960” (Cambridge University Press, 2011). Lecocq, Baz “The Bellah Question: Slave Emancipation, Race, and Social Categories in Late Twentieth-Century Northern Mali”, *Canadian Journal of African Studies*, 39-1 (2005), pp.42-68. Pelckmans, Lotte ““Having a Road”; Social and Spatial Mobility of Persons of Slaves and Mixed Descent in Post-Independence Central Mali”, *Journal of African History*, 53 (2012), pp.235-255. Scheele, Judith “A Pilgrimage to Arawan; Religious legitimacy, status, and ownership in Timbuktu”, *American Ethnologist*, 40-1 (2013), pp.165-181 など
- <sup>12</sup> Hunwick, “A Region of the Mind”.
- <sup>13</sup> Hall, *A History of Race in Muslim West Africa*, pp.34-36.
- <sup>14</sup> Ibid., p.366
- <sup>15</sup> Ibid., p.360
- <sup>16</sup> Willis, J. Ralph “Jihad and Ideology of Enslavement”, in Willis (ed.) *Slaves and Slavery in Muslim Africa*, vol.1, 20(London, Franc Cass.1985).
- <sup>17</sup> Last, Murray ““Uthmān b. Fūdī”, *Encyclopaedia of Islam* (new edition), X,(Leiden, Brill, 2000). Robinson, David, *Holy War of Umar Tall*, Oxford, (Clarendon Press 1985).
- <sup>18</sup> Hall, “The Question of “Race””, p.360.
- <sup>19</sup> Lecocq, “The Bellah Question”, p.46.
- <sup>20</sup> Norris, H. T. *The Tuaregs: their Islamic Legacy and Its Diffusion in Sahel*, (Warminster, England, Aris & Phillips Ltd. 1975), pp.6-7.
- <sup>21</sup> たとえば Coquery-Vidrovitch, Cathérine “Les catégories de désignation des Africains dans l’histoire (noir, nègre, sujet, indigène...)”, in O. Georg and A. Pondopoulo (eds.), *Islam et sociétés en Afrique subsaharienne à l’épreuve de l’histoire* (Paris, Khartala, 2012).
- <sup>22</sup> Harrison, Christopher *France and Islam in West Africa, 1860-1960* (Cambridge University Press 1988), p.214.
- <sup>23</sup> Pelckmans, ““Having a Road””, pp.235-255.,238-9.
- <sup>24</sup> Hall, *A History of Race in Muslim West Africa*, pp.122-128.
- <sup>25</sup> Lecocq, “The Bellah Question”,46.
- <sup>26</sup> Ibid., pp.48-53.
- <sup>27</sup> Ibid., pp.59-62.
- <sup>28</sup> Scheele, “A Pilgrimage to Arawan”.
- <sup>29</sup> Ibid., p.174.